貝塚市埋蔵文化財調査報告　第32集

貝塚市遺跡群発掘調査概要16

1994.3.31

貝塚市教育委員会

はじめに

わが貝塚市は、北に波静かな大阪湾、南に緑豊かな和泉山脈とに接し、恵まれた自然環境を有する地域であります。その自然環境の良さから、市内にはわたくしたちの先人が残した数多くの遺跡が存在します。

これらは貴重な歴史的・文化的遺産であり、後世に伝えるために保護を講ずることは、現在に生きるわたくしたちに与えられた義務であります。しかし、近年の都市化の波による各種開発はこれらを破壊の危機にさらしています。

今回の調査もこうした開発行為に伴う事前調査でありますが、幾多の成果を得ることができましたのでここに平成5年度中に実施しました市内埋蔵文化財緊急発掘調査の一部を報告いたします。本書の刊行にあたりまして、皆様の文化財に対するご理解を深めていただくとともに、文化財の保護・保存、研究の一助となれば幸いに存じます。

なお、調査並びに本書作成にあたり、地元の方々をはじめ関係者各位には多大なご理解ご協力を頂き、末筆ではありますがここに深く感謝の意を表す次第であります。

平成6年3月31日

貝塚市教育委員会
教育長　福井昱彦

例　　言

1．本書は貝塚市教育委員会が平成５年度に国庫補助金を受けて実施した、大阪府貝塚市域における埋蔵文化財緊急発掘調査結果のうち、秦廃寺、貝塚寺内町遺跡の発掘調査にかかる結果の概要報告である。

2．発掘調査は貝塚市教育委員会社会教育課文化財係、学芸員前川浩一、三浦　基、上野裕子が担当し、平成５年５月27日より調査を実施し、平成６年３月31日に終了した。

また、現地調査および本書作成にかかる諸作業については、下記の諸氏の参加を得て実施したものである。

足立　涼子　　石橋　孝子　　大西　隆子　　國本　純子　　澤村　香織
清水　久子　　中辻　澄子　　橋本さおり　　藤井記代美　　前川　自子
南　　明美　　森村　紀代　　山本　寿子

3．本書の執筆、編集は前川が担当した。

目　　次

はじめに

例　　言

目　　次　（本文目次、図版目次、挿図目次）

Ⅰ．秦廃寺の調査

1．位置と環境 …… 1

2．調査の概要 …… 2

3．検出遺構 …… 3

4．出土遺物 …… 4

5．まとめ …… 6

Ⅱ．貝塚寺内町遺跡の調査

1．位置と環境 …… 8

2．調査の概要 …… 9

3．出土遺物 …… 10

4．まとめ …… 16

図　版　目　次

図版１　秦廃寺
　１．第１区全景
　２．第１区土層状況

図版２　秦廃寺
　１．第２区検出状況
　２．同　　上

図版３　秦廃寺
　１．第２区検出状況
　２．同　　上

図版４　秦廃寺
　１．第２区完掘状況
　２．同　　上

図版５　秦廃寺
　ＳＸ－１出土遺物

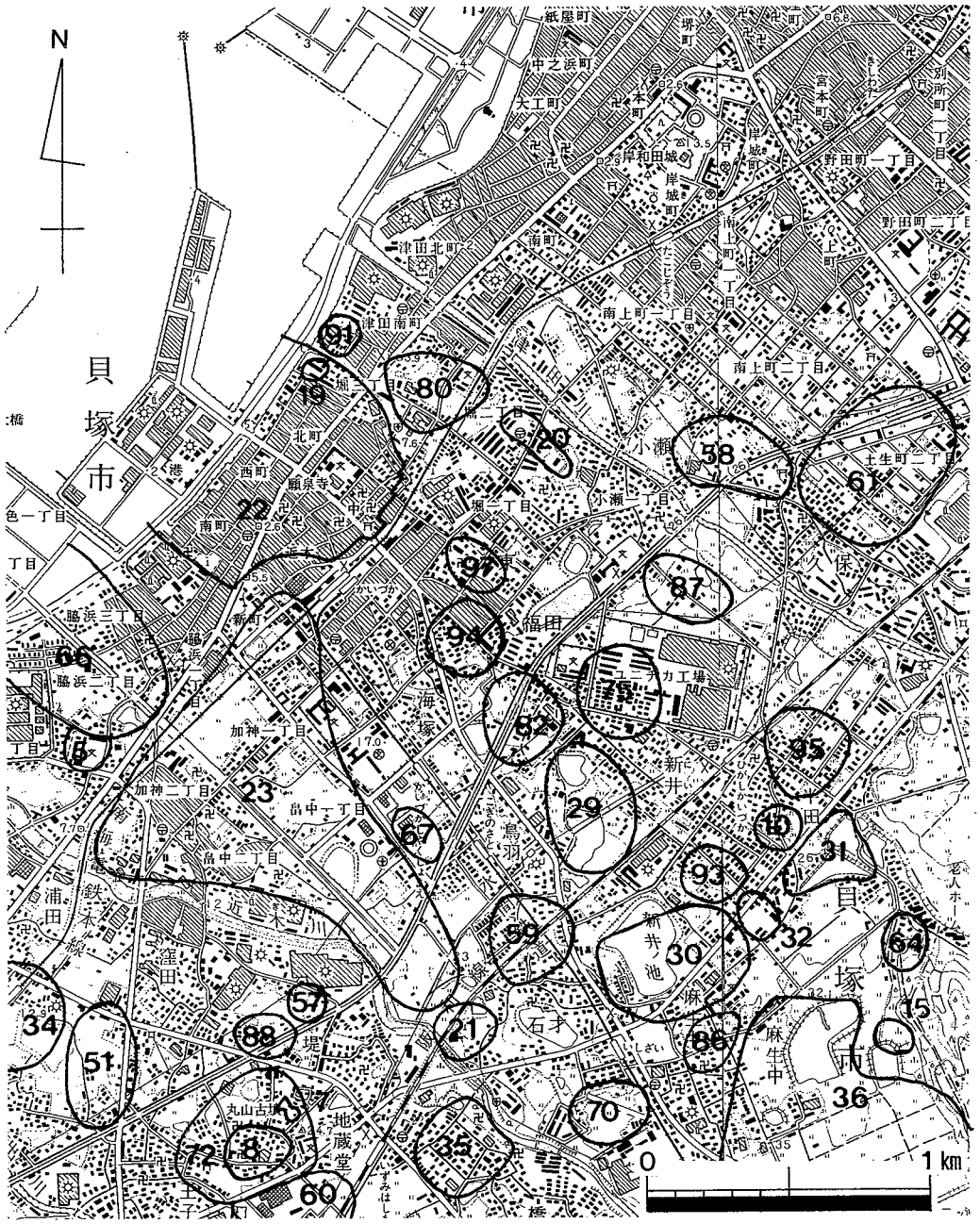
図版６　貝塚寺内町遺跡
　１．土層状況
　２．遺物出土遺物

図版７　貝塚寺内町遺跡
　出土遺物

図版８　貝塚寺内町遺跡
　出土遺物

挿　図　目　次

図１　貝塚市遺跡分布図
図２　秦廃寺調査地位置図
図３　調査地概略図
図４　遺構配置図
図５　ＳＸ－１出土遺物
図６　遺物包含層出土遺物
図７　貝塚寺内町遺跡調査地位置図
図８　調査地概略図
図９　出土遺物
図10　出土遺物
図11　出土遺物
図12　出土遺物



5.長楽寺跡　7.丸山古墳　8.地蔵堂廃寺跡　10.秦廃寺　15.麻生中新池遺跡　19.泉州麻生塩壺出土地　20.堀遺跡　21.橋本遺跡　22.貝塚寺内町遺跡　23.加治神前畠中遺跡　29.新井鳥羽遺跡　30.新井ノ池遺跡　31.半田遺跡　32.麻生中遺跡　34.澱池遺跡　35.積善寺遺跡　36.清児遺跡　51.窪田遺跡・窪田廃寺跡　57.堤遺跡　58.小瀬五所山遺跡　59.石才遺跡　60.王子遺跡　61.土生遺跡　64.海岸寺山遺跡　66.脇浜遺跡　67.今池遺跡　70.石才南遺跡　72.地蔵堂遺跡　75.新井鳥羽北遺跡　80.津田遺跡　82.福田遺跡　86.麻生中出口遺跡　87.小瀬遺跡　88.堤三宅遺跡　91.堀新遺跡　93.麻生中下代遺跡　94.堀秋毛遺跡　95.半田北遺跡　97.東遺跡

図1　貝塚市遺跡分布図

Ⅰ　秦廃寺の調査

1．位置と環境（図2）

調査を実施したのは貝塚市北部に位置する秦廃寺の一角である。

秦廃寺は貝塚市と岸和田市のほぼ境を流れる津田川左岸に位置し、東西約150ｍ、南北約150ｍの寺域をもつと考えられ、海抜約25ｍを測る段丘上に立地する。明治時代に合祀され廃された麻生河王子社跡付近の開墾により白鳳時代の瓦が多量に出土し、それらが古くから紹介された遺跡である。しかし、調査例は少なく、遺跡の内容は明らかではない。

周辺の遺跡としては、北には中世の集落跡である半田北遺跡、南には中世の集落跡である麻生中下代遺跡、西には中世の集落跡、寺院跡である新井・鳥羽遺跡、東には中世の散布地である半田遺跡が存在する。また、東約100ｍには熊野街道が南北に通り、一里塚が存在する。周辺の調査例は確認調査が数例ある程度であり、まとまった調査はなく、この地域の歴史的変遷は明確ではない。

今回の調査地は遺跡マーク地の西端にあたり、既に住宅密集地となっている貝塚市半田709である。

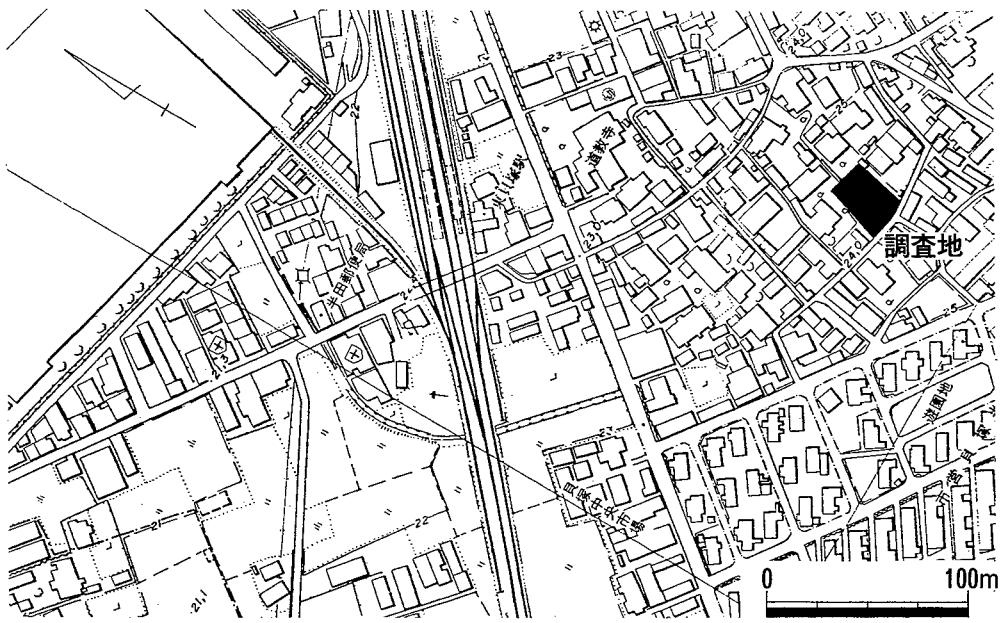


図2　秦廃寺調査地位置図

2．調査の概要（図３）

開発計画にもとづき、調査対象地内北部に1.5×2.5ｍの調査区、南西部に２×５ｍの調査区を設定し、前者を第１区、後者を第２区として調査を実施した。

調査地における層序は、第１区では上から順に淡褐色シルト質土（第１層、約20㎝）、褐色シルト質土（第２層、約15㎝）、淡褐色シルト質土（第３層、約10㎝）が堆積し、その下に地山となる暗黄茶色土が存在する。第２区では褐色シルト質土（第２層）のみが堆積し、層厚約30㎝を測る。その下に地山となる暗黄茶色土が存在する。第１区、第２区の地山面の高低差はほとんどなく、ほぼフラットである。

遺構はすべて第２区地山面にて検出し、第１区では遺構は存在しなかった。

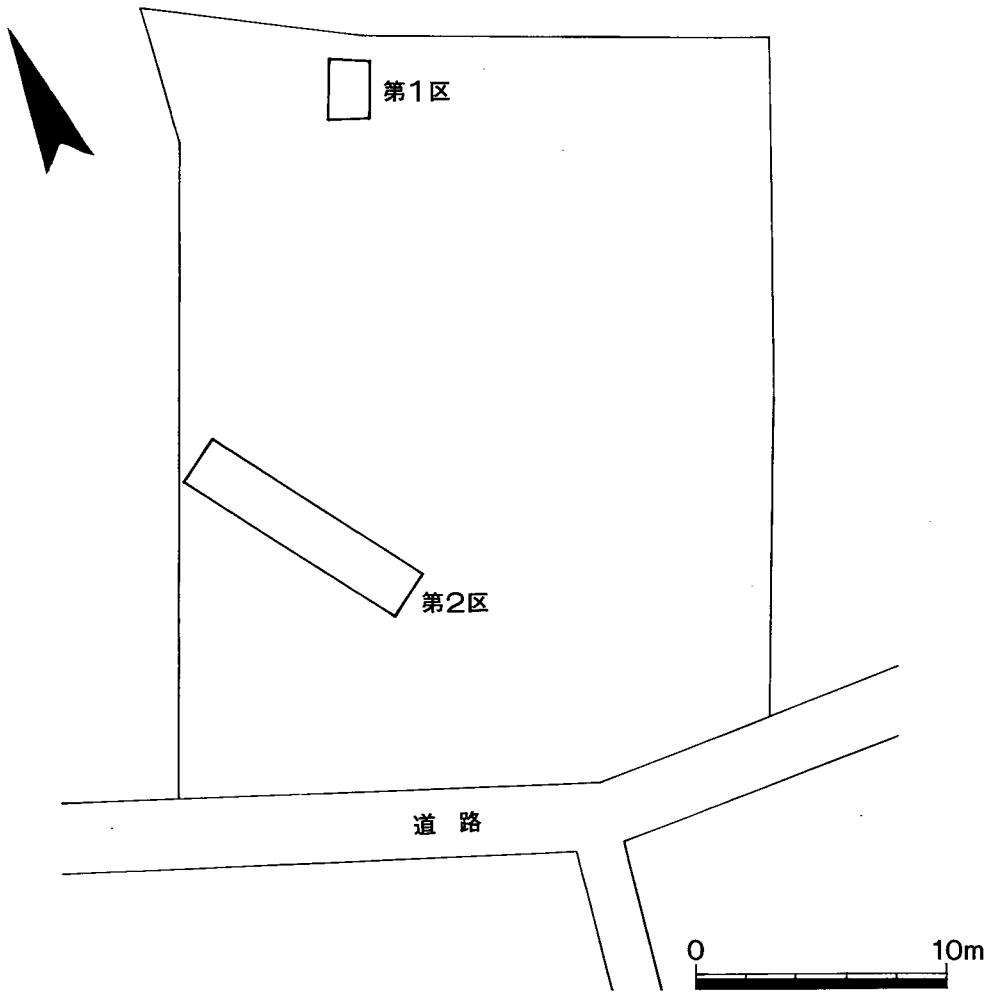


図３　調査地概略図

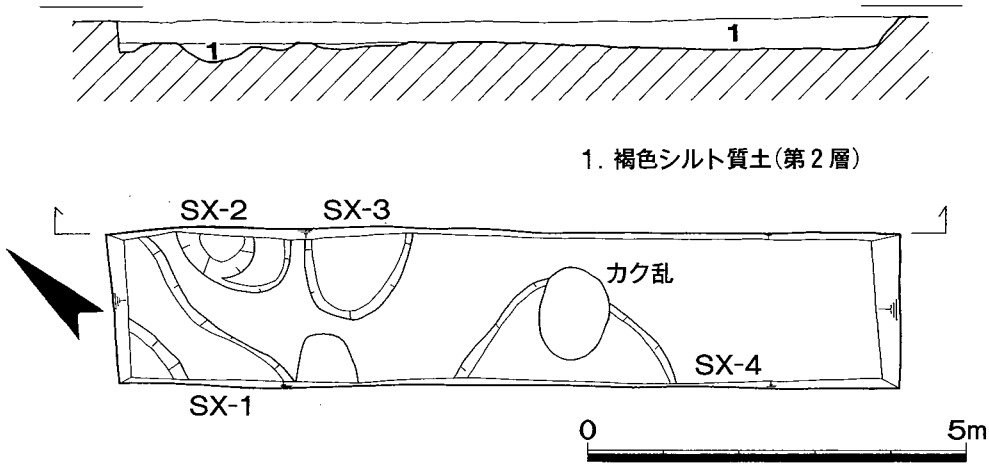


図4　遺構配置図

3．検出遺構（図4）

調査では第2区地山面において、4ケ所の遺構を検出した。埋土はいずれも面上に堆積する褐色シルト質土である。時期的には近世のものと思われる。

第1区では遺構を確認できなかった。

以下、その概要を示す。

ＳＸ－1

本遺構は第2区西端にて検出した溝と考えられるものである。調査区外に広がるため全体の規模は不明であるが、検出幅1.1m、深さ31cmを測る。埋土は褐色シルト質土であり、断面は2断状である。遺物は今回の検出遺構の中で最も多く、瓦片、瓦質羽釜、陶器すり鉢等が出土した。

ＳＸ－2

本遺構はＳＸ－1東側にて検出した土坑である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、長軸1.5m、短軸0.7m、深さ20cmを測る。埋土は褐色シルト質土であり、2段に掘りこんでいる。遺物は瓦片が出土した。

ＳＸ－3

本遺構はＳＸ－2南側にて検出した土坑である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、幅約1.3m、深さ6cmを測る。埋土は褐色シルト質土であり、断面はレンズ状を呈す。遺物は出土していない。

ＳＸ－４

本遺構は調査区中央にて検出した土坑である。調査区外に広がるため全体の規模は不明だが、長軸３ｍ、短軸1.3ｍ、深さ６㎝を測る。埋土は褐色シルト質土であり、断面はレンズ状を呈す。遺物は出土していない。

４．出 土 遺 物

調査では遺構、遺物包含層より、中世、近世の土器等が出土している。量的には瓦が多く、特に中世の瓦が多い。次に近世の陶磁器が多く、中世の土器は最も少ない。

以下、主なものについてその概要を示す。

ＳＸ－１（図５、図版５）

１、２は瓦質羽釜である。口縁部外面に段を有するものである。内面はハケ目、体部外面に横位ケズリを施す。

３は陶器擂鉢である。片口を有し、復元口径26㎝を測る。

４は青磁皿と思われる。復元口径14.2㎝を測る。

５は瓦質羽釜と思われる。内面には指頭圧痕が残り、復元口径29.2㎝を測る。

６は土師質を呈す火鉢と思われる。内外面にナデを施し、外面にスタンプ文を有する。復元口径25.2㎝を測る。

７～12は瓦である。７は軒丸瓦である。瓦当部は接合痕が残るのみである。内面に糸切り痕、布圧痕が残る。８は軒平瓦である。瓦当部は唐草文が残るが上半部分であるため不明確である。９、11は丸瓦である。９は内面に糸切り、布圧痕を有し、外面はナデを施す。11は内面布圧痕を有し、外面はナデを施す。10は平瓦である。凹面は布目痕、凸面は縄目タタキを施す。12は鬼瓦と思われる。

遺物包含層（図６）

13～20は第１区第１層、第２層出土である。

13～15は磁器である。13、14は染付丸小碗である。外面に梅文を施す。13は口径10㎝、高さ5.2㎝、14は口径9.4㎝を測る。15は皿と思われる。外面底部は露胎であり、淡赤色を呈す。見込みは蛇の目釉はぎである。釉は灰白色である。

16は陶磁器である。高い高台をもち、アメ色の釉がかかる。全面に貫入があり、胎土は炻器状である。

17、18は陶器である。17は復元口径10.8㎝を測る。ロクロびきの痕跡が残り、淡褐色の

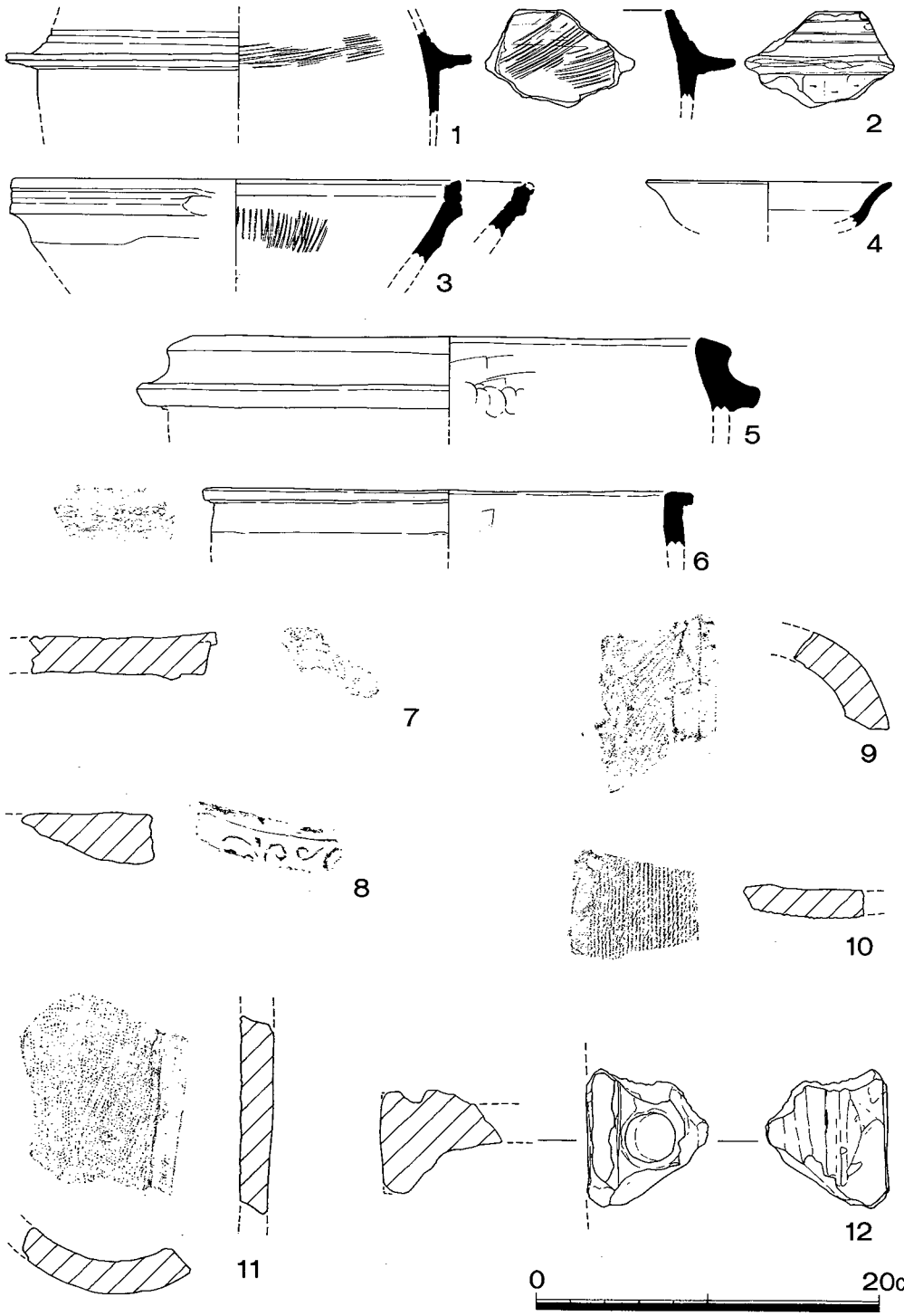


図5　SX－1　出土遺物

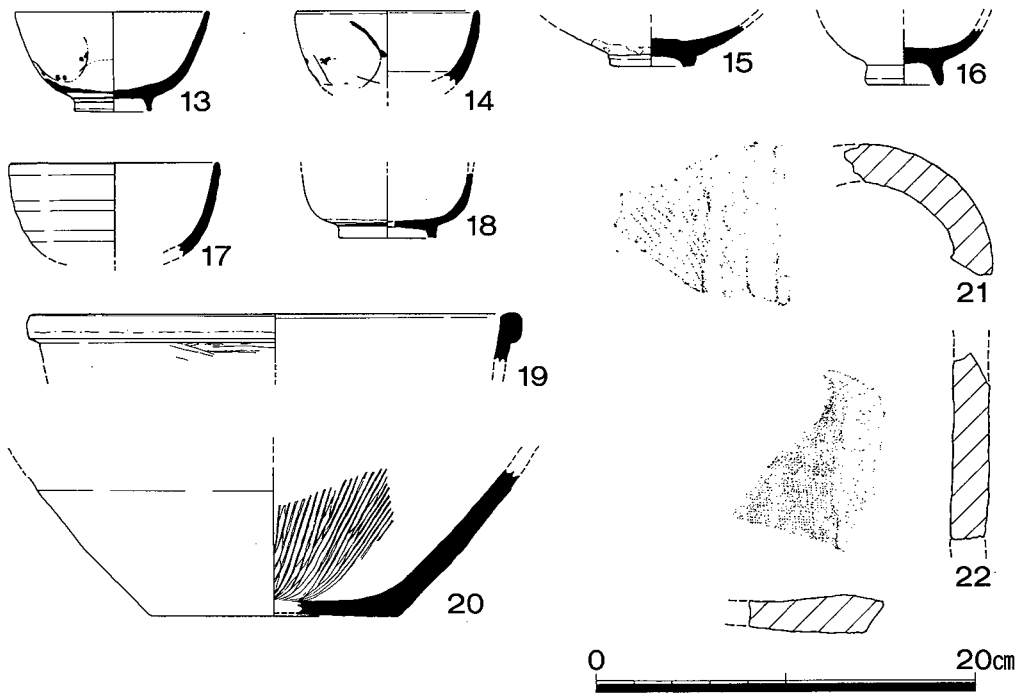


図6　遺物包含層出土遺物

釉が薄くかかる。18は底部外面は露胎であり、ロクロケズリが残る。淡赤色の釉が薄くかかる。

19は陶器鉢である。復元口径24cmを測る。

20は陶器すり鉢である。外面は回転ナデを施す。

21、22は第2区第2層出土である。

21は丸瓦である。内面は糸切り、布圧痕が残り、外面はナデを施す。

22は平瓦である。凹面は布圧痕、凸面は縄目タタキが残る。

5．まとめ

今回の調査は様々な制約の中での調査ではあったが、一応の成果は得られたものと思われる。

遺構、包含層成立時期は近世以降であることが出土遺物から考えられる。しかし、その中には中世の瓦、土器が良好な保存状態で出土し、当地域の中世を考える上で貴重な発見となったと云えよう。

瓦の状況から云うと、中世段階に当地域に寺院が存在したことは確実であり、その後、

廃絶もしくは近世まで存在したか不明であるが、近世段階に大規模な開発によって、これらが近世の遺構の内に取り込まれたことが考えられる。また、遺構からはこの近世の開発は現集落にかかわるものと推定できる。

秦廃寺については、遺跡マーク地東半において、白鳳時代、中世の瓦が出土したこと、同地域の小規模な調査において瓦が出土したこと以外、遺構の内容についての事実は判明していない。そのような状況の中で、遺跡マーク地の西部において、このような成果が得られたことは注目を引く。

今後の問題点としては、

(1)中世以前の状況

(2)中世の寺院跡の変遷、遺構の広がり

(3)近世遺構の広がり

が挙げられる。

本調査地周辺は従前に宅地化が進んでおり、まとまった調査は期待できない地域であるが、上記の問題点を踏まえ、小さな開発においても密度の高い調査を実施して行きたい。

Ⅱ　貝塚寺内町遺跡の調査

1．位置と環境（図７）

調査を実施したのは貝塚市北部に位置する貝塚寺内町遺跡の一角である。

貝塚寺内町遺跡は貝塚市の海岸部に位置し、砂帯から中位段丘端部、海抜２～９ｍを測る地点に位置する。中世末から近世にかけて寺内町として栄え、古絵図によると周囲には堀と土塁が巡り、防備の施された城塁的都市であったことがわかる。

周辺の遺跡としては、東には中世から近世の集落跡、窯跡と思われる津田遺跡、近世散布地である東遺跡、中世の集落跡である堀秋毛遺跡、南には古墳時代以降の集落跡である加治神前畠中遺跡、縄文時代以降の散布地、集落跡である脇浜遺跡が存在し、南側の遺跡を除くと周辺は中世以降に開けた地域である。

今回の調査地は遺跡マーク地の南端にあたり、貝塚市南町1123他である。摂河泉文庫、南川孝司氏によると、調査地周辺は本市を代表する願泉寺御庭焼という窯業の「陶器所」が存在した場所であるとしている。また、土地所有者の言では、昔その場所は陶器の倉庫であったということを聞いているとのことであった。

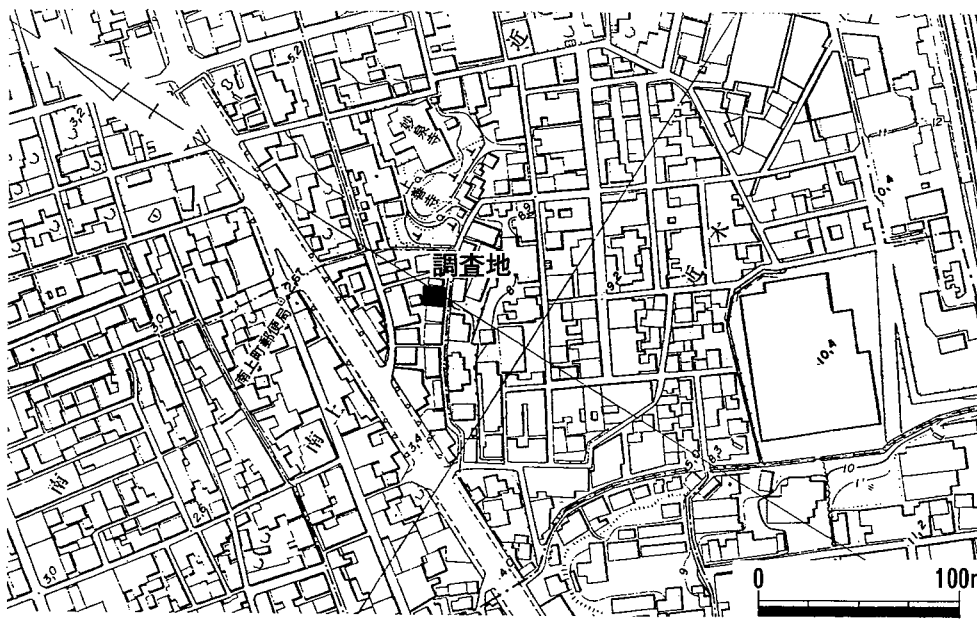


図７　貝塚寺内町遺跡調査地位置図

2．調査の概要（図８）

調査は開発計画にもとづき、建物基礎掘削部分全面を対象として実施した。

調査地内の基本層序は現代盛土の直下に、陶器等を多量に含む暗灰色粗砂混粘質土（第２層、約20㎝）が存在し、その下に黒褐色粘質土（第３層、約15㎝）、黄灰色、灰色混粘質土（第４層、約30㎝）、暗灰色粗砂混粘質土（第５層、約20㎝）となる。

第５層を確認したレベルにて、開発建物基礎底部に達したため、この段階にて掘削を終了し、地山等の検出は行わなかった。

遺物は第２層より多量の陶器、窯道具等が出土した。しかし、第４層から寛永通宝１点が出土した以外、他の層からの出土はなかった。したがって、各層の時期決定は難しい。

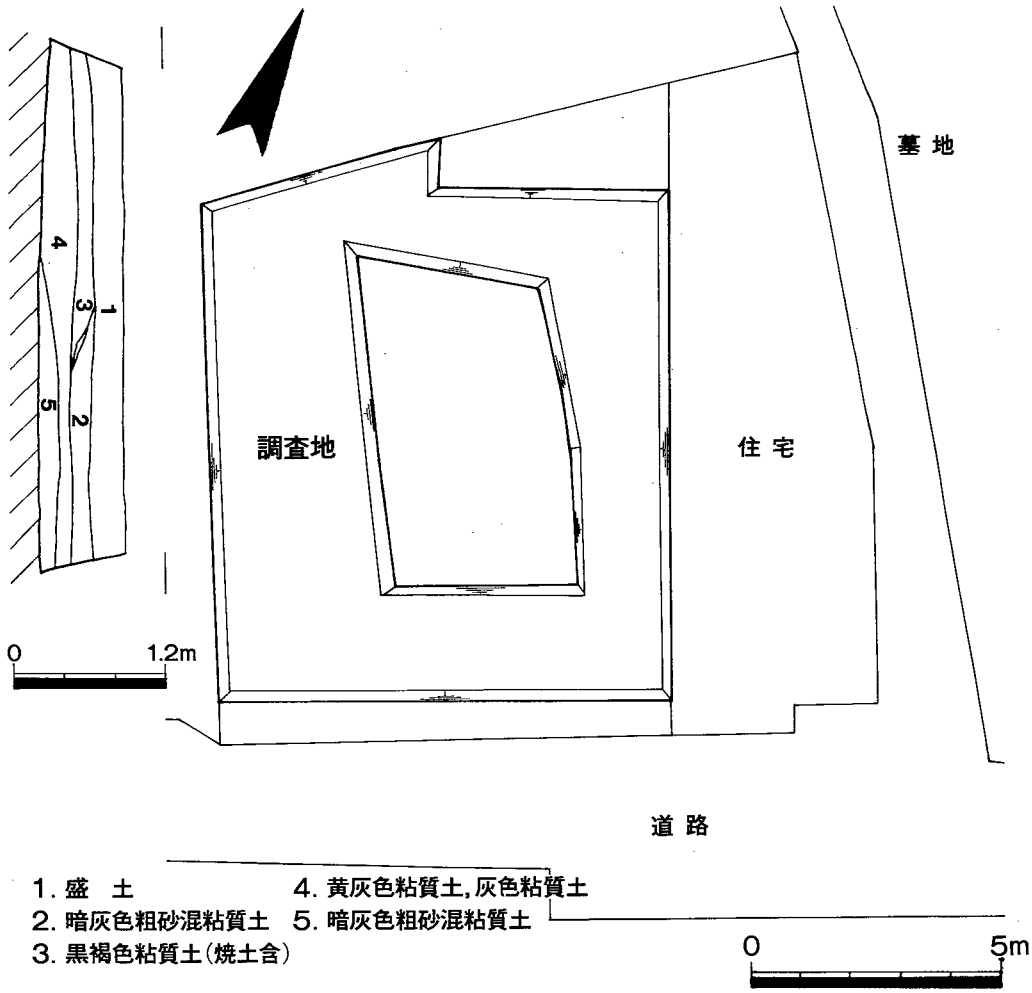


図８　調査地概略図

土層堆積の状況からすると、第1層は今回の開発にかかる盛土であり、第4層は土間状につき固められており、開発地の既設建物にかかわるものと思われる。第2層、第3層については、第3層、第2層の順に盛土したような状況を呈し、現代盛土とはかかわりのないことは考えられるが、層の意味については判断が難しい。既設の建物は、持ち主によると江戸時代のものであったとの話であるが、確認は取れていない。

地山面を確認していないこともあり、遺構は検出していない。

以下、第2層の出土遺物について、その概要を示す。

3．出土遺物（図9～12、図版7、8）

調査では第2層から所謂「伊賀・信楽焼系」といわれる陶器、匣鉢、タナ板等窯道具が多量に出土した。一部、染付等出土したものの、大部分はこれらのもので占められる。

以下、主なものについてその概要を示す。

23、24、26は染付碗である。23は釉がくすみ灰色を呈し、口径11.2cm、高さ5.4cmを測る。24は立浦草花文を内外面に施し、口径9.3cm、高さ4cmを測る。26は高台径4.2cmを測る。

25は陶器である。ケズリ出し高台を有し、外面、内面は明るい赤灰色の釉をかける。高台内には「朝日」の刻印がある。

27は磁器仏飯器である。口径4.8cm、高さ約6cmを測る。色絵付によって文様を施す。

28は灯さんである。口径5.8cm、高さ1.3cmを測る。ロクロ成形であり、底部外面に回転糸切り痕を有す。内面から外面上半にかけて柿釉がかかる。

29は磁器杯である。内面に山、鶴等の絵付を有す。口径6.8cm、高さ2.7cmを測る。

30～78は所謂「伊賀・信楽焼系」といわれる陶器である。

30、31は茶入の蓋と思われる。大きく外反する蓋部をもち、底部外面はヘラ切り痕を有す。30は円形のつまみをもつが、31は不明。30は高さ2.1cm、31は蓋部のみで高さ1.1cmを測る。

32、33は行平蓋である。高台状のつまみをもち、外面には沈線がある。沈線は32が8条、33が5条を有す。

34～37は土瓶蓋である。平らな底部から体部はほぼ直立し、口縁部にて折り曲げる。口径5.2～6.5cm、高さ1.9～2.2cmを測る。つまみは2種あり、2方をつまみ上げたもの(35､37)、3方をつまみ上げたもの（34、36）がある。底部外面はロクロによるケズリを施し、上面部分のみ釉がかかる。

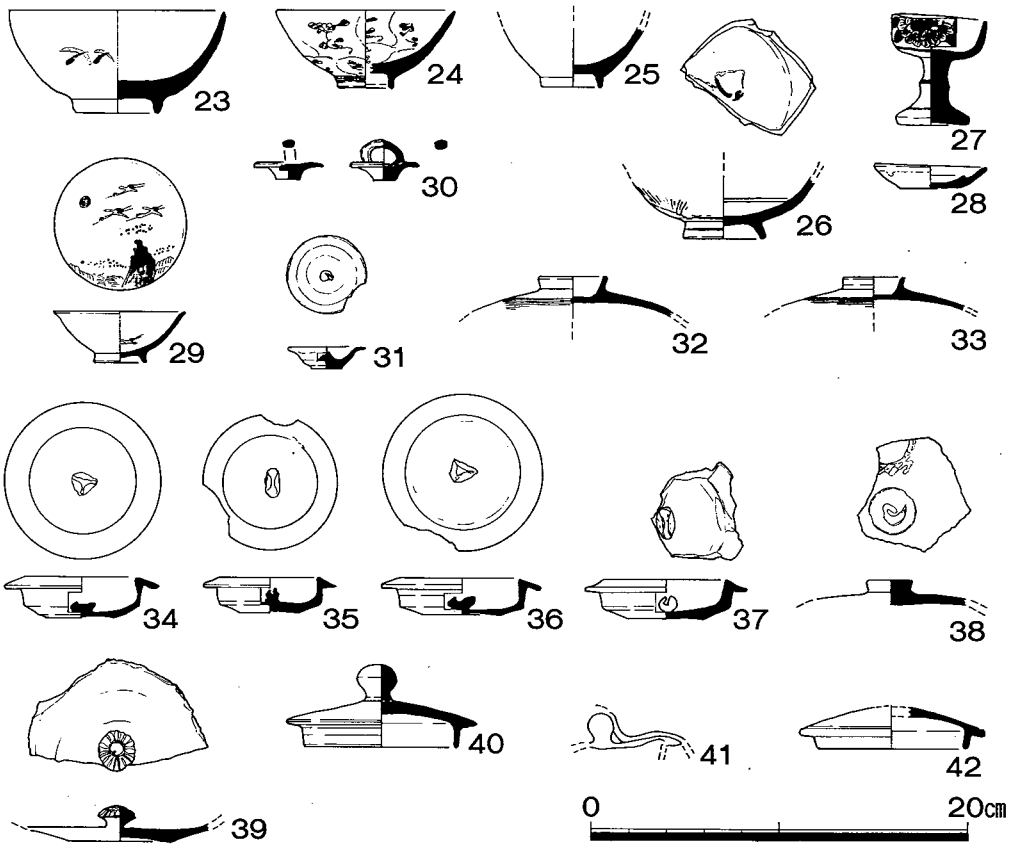


図9　出　土　遺　物

38は不明蓋である。つまみ上面に「の」字の切込みがあり、外面はイッチンによる絵付を有す。

39～42は土瓶蓋である。

39は34～37と同形態をとるものと思われるが、底部以外残存しないため、ここでは一応別けている。菊花状のつまみを有し、外面はロクロのケズリを施す。

40、41は球状のつまみを有す蓋である。42も40と同形態と思われる。ロクロにより成形し、上面のみ施釉する。41は焼成時に別個体が付着している。40は口径8㎝、高さ4.4㎝、42は口径7.8㎝を測る。

43～45は土瓶口縁部片である。沈線を施すもの（43、44）、イッチンがきのもの（45）がある。43には山型の把手用の耳が付き、他のものもつくと思われる。

47は土瓶注ぎ口部片である。体部に沈線を施し、注ぎは3ケ所孔を穿つ。

48～50は土瓶底部片である。上げ底になっており、外面にはロクロによるケズリを施す。

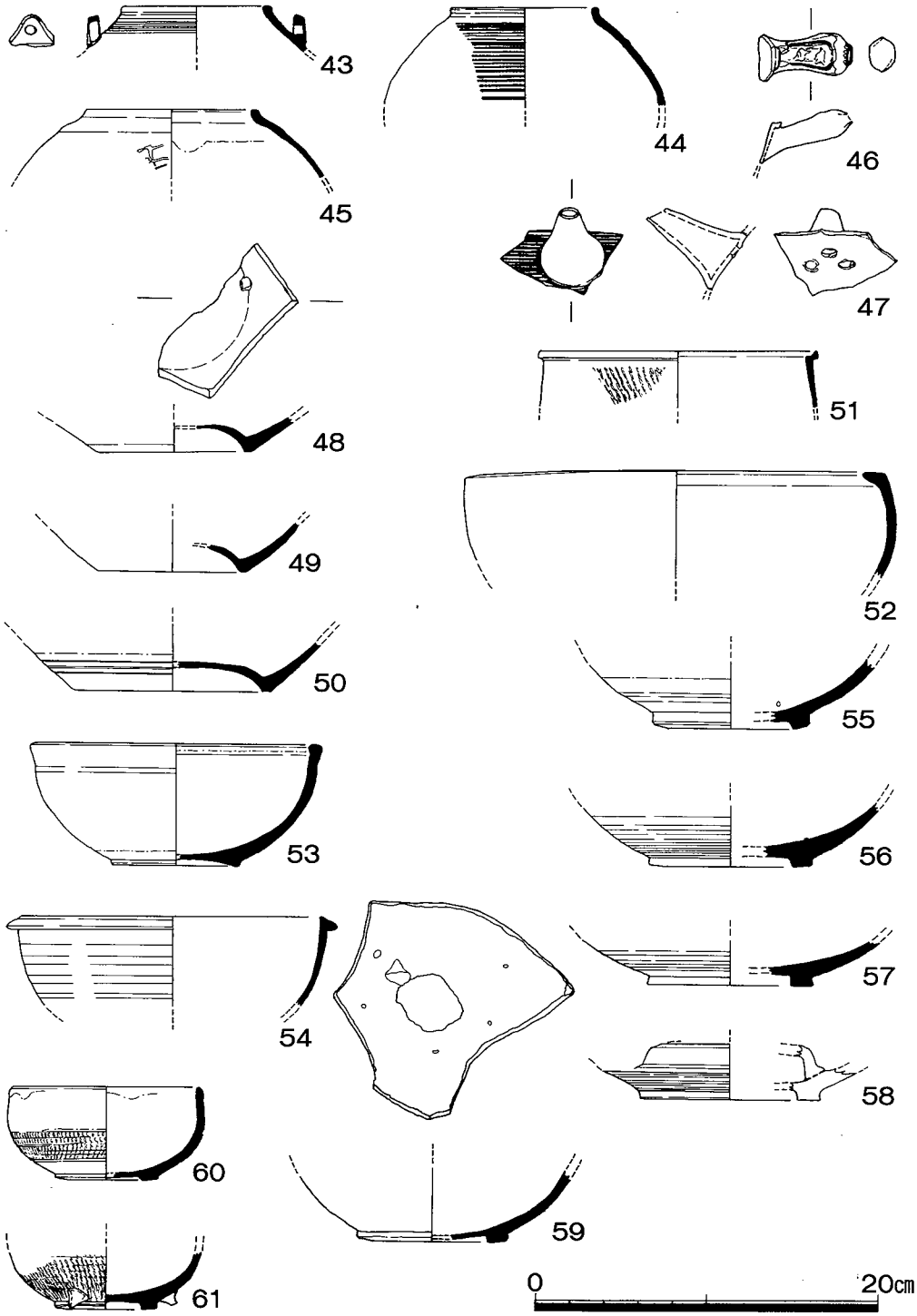


図10　出　土　遺　物

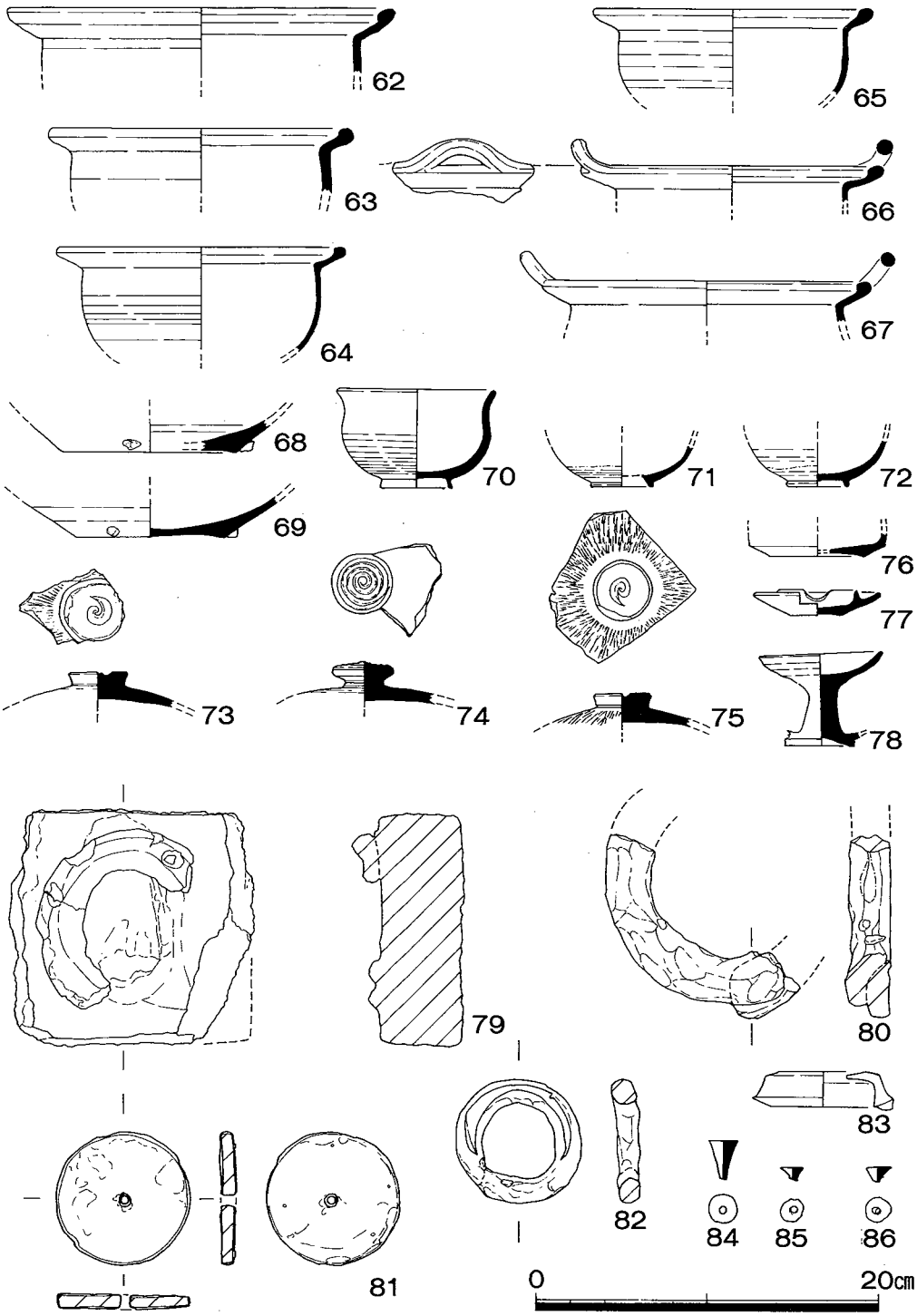

62
65
63
66
64
67
68
70
71
72
69
76
77
73
74
75
78
79
80
83
82
84
85
86
81
0
20cm

図11　出　土　遺　物

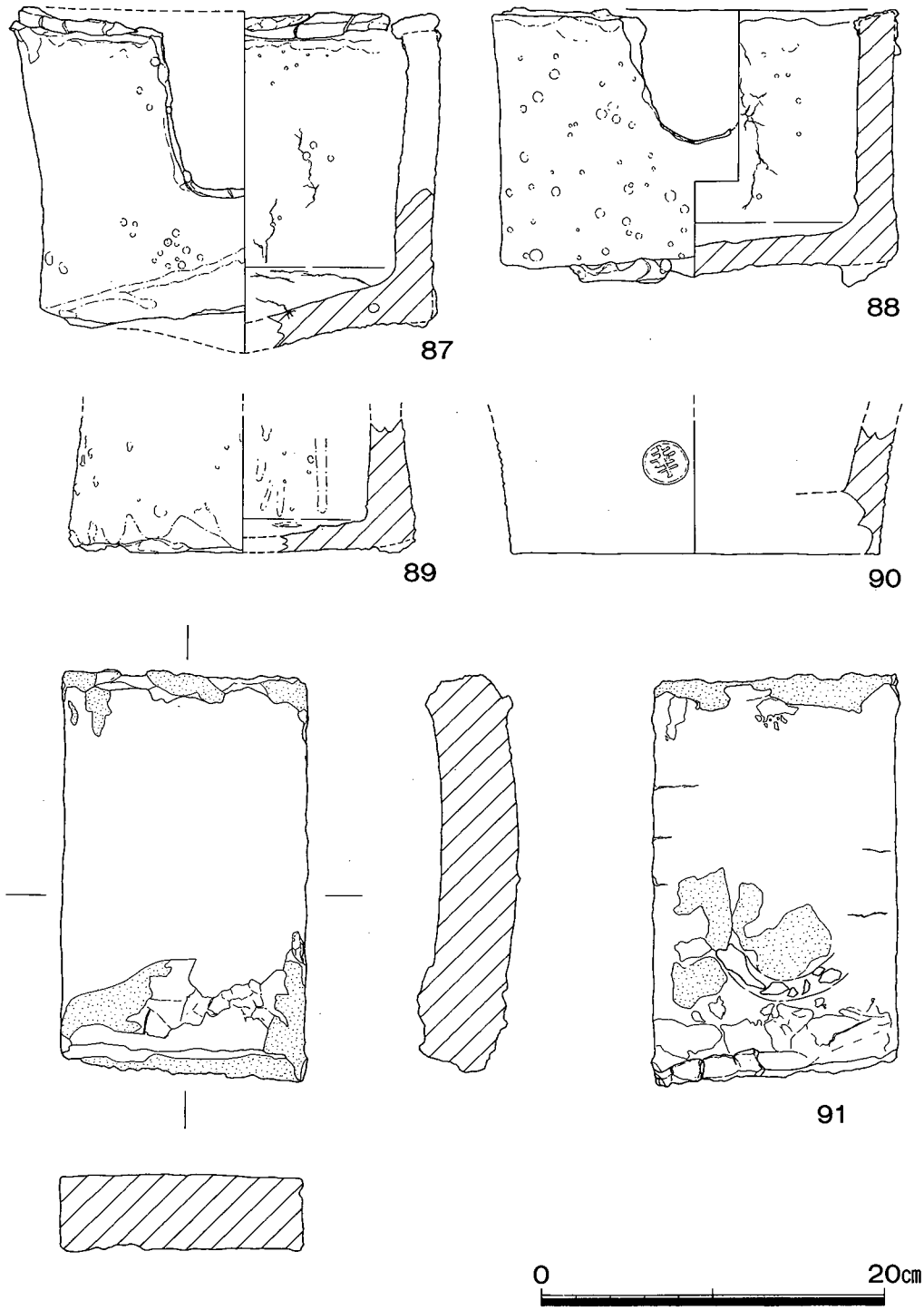


図12 出 土 遺 物

50は外面に3条の沈線が入る。

46は行平把手である。中空であり、上下2枚を型造りしてはり合わせる。上面に不明確な文様をつける。

51は行平口縁部片である。復元口径16.1cmを測り、注ぎ口、把手部分は残っていない。外面はトビガンナを施す。口縁部上面を除き、内外面施釉する。

52は片口である。内湾する体部に内側に広がる口縁をもつ。注ぎ口の部分は残っていない。復元口径22cmを測り、内外面に施釉する。

53、54は鉢である。53は口縁部端をふくらませ、上面に面をもつ。口径16.1cm、高さ7.1cmを測る。内外面施釉し、ケズリ出しによる高台部分のみ露胎である。54は口縁部外面をつまみ出すものである。口径17.4cmを測る。ロクロにより成形し、外面はロクロによるケズリを施す。素焼である。

55～59は鉢または片口底部である。高台はロクロによるケズリ出しであり、外面もケズリを施す。内面はロクロ成形痕が残る。内面および外面下半まで施釉する。58は内面にトチンが付着する。59は素焼き時のピン跡2ケ所、施釉後のピン跡3ケ所が残り、ピンが1つ付着している。

60、61は腰折椀である。60はロクロ成形後高台はケズリ出しで、体部下半にトビガンナを施し、その上下には沈線を入れる。内面から外面の上の沈線まではオリーブ色の釉をかけ、トビガンナの部分は茶色の釉をかける。61は外面下半にトビガンナを施し、ピンが付着する。

62～67は土鍋口縁部片である。体部はやや内湾し、頸部で外上方におりかえし、口縁部は内側におり曲げ肥厚させる。ロクロ成形後外面はロクロによるケズリを施す。66、67は把手が残り、他は残っていない。80は素焼きであり、他は内外面に薄く施釉する。

68、69は土鍋底部である。外面はロクロによるケズリを施し、底部はケズリによりやや上げ底状である。足が3ケ所につく。

70は端反椀である。外面下半から高台内にかけてロクロによるケズリを施し、高台もケズリ出しによる。内外面共に施釉する。畳付には小さい胎土目がつく。口径9cm、高さ5.8cmを測る。

71、72は椀である。70と同様の方法により形成されているが、高台がやや太く短い。

73～75は行平の蓋と思われる。つまみ上面に「の」字の切り込みが入るもの（73、75）うず巻きのもの（74）があり。蓋部上面にトビガンナを施すもの（73、75）がある。

76は筒小椀と思われる。底部はロクロによるケズリを施す。

77は灯さんである。底部、下面はロクロによるケズリを施し。内面は1ケ所U字形の切り込みの入った桟が設けられる。口径7.2cm、高さ1.5cmを測る。

78は灯明台である。杯状を呈する部分からほぼまっすぐ下に柱状の脚がつき、その下部に高台をもつ杯状部分からなる。復元口径7cmを測る。

79～91は窯道具である。

79はタナ板に輪トチンが付着したものである。タナ板は厚さ約4.8cmを測り、側面部分以外緑色の釉がかかる。トチン上面は付いていた陶器の形が残り、2ケ所ピン跡のような穴が残る。トチンについては胎土の状態で陶器に付け焼いたものと推定できる。

80、82は輪トチンである。79に付着したものと同様のものである。陶器に輪にして押しつけた時の接合した跡が残る。80は大型、82は小型である。

81はハマと思われるが蓋の可能性もある。全体に施釉され、中心に孔が穿たれている。右側面には4ケ所のピン跡がある。直径7.8cm、厚さ8mmを測る。

83は輪トチンである。ケズリにより成形している。底部にはピンが付着する。

84～86はピンである。型により成形している。

87～90は厘鉢である。口縁部に切り込みを2ケ所をもち、切り込みが深いものと浅いものとがある。口縁部と底部に輪トチンと同様の胎土を貼り付け重ねているものと思われる。胎土は信楽焼状を呈し、側面等は釉がかかる。87は直径約24cm、高さ17.6cm、88は直径23.6cm、高さ16cmを測る。89は直径20.2cmを測り、やや小さい。90は形がいびつではなく、外面に丸に幸の刻印が入る。直径21.8cmを測る。

91はタナ板である。右側面下部に輪トチンと同様の胎土がつく。小口側面以外は全体に釉がかかる。厚さ約4.4cmを測る。

これらの釉はオリーブ灰色系の釉がかかる。

4．ま と め

今回の調査は多くの制約のため、充分な調査が実施できたとは云えない。しかし、厳しい条件下ではあったが、新たな事実が判明し、今後に問題を残すものの一応の成果は得られたものと思われる。

遺構については地山面を検出せず、盛土状を呈する部分までの掘削であったため、見るべきものはない。しかし、陶器等を多量に出した第2層下の第4層上面、土間状部分の時

期的なことが、これら陶器の時期を考える上で問題となる。面的に調査できなかったため、今後周辺の調査によって検討することとしたい。

出土遺物の大部分を占める陶器類は、貝塚市堀付近に窯が存在したとされる音羽焼として紹介されている陶器類とほぼ同一のものである。また、本市報告第33集として出版予定である平成4年度実施の堀新遺跡の調査からもこれら陶器類と同様のものが多量に出土した。

音羽焼として紹介されているもの、堀新遺跡出土のものは、器種、釉調、窯道具類等まったく同一のものであり、「音羽焼」と云う名称についての問題は存在するものの、同じ窯にて焼成されたことが云える。しかし、今回の調査のものは、釉調、窯道具類は同一であるものの、器種に若干の違いが存在し、同一のものであるとは現時点では断定できない。

摂河泉文庫南川孝司氏によると、本調査地周辺は江戸時代から明治時代初頭にかけて、「陶器所」と云うものが存在した地域であるとしている。さらに、その「陶器所」は願泉寺御庭焼にかかわるものとしている。また、先述したとおり、地元には当地に昔陶器の倉庫が存在したという話がある。

これらの話は文献等によって裏付けられたものではないが、もし事実であるならば、音羽焼と願泉寺御庭焼と云う、まったく違った焼物として捉えられているものが、ほぼ同一のものであるとなってしまう。

本市の海岸部付近では、江戸時代頃始まるとされる窯業が数種伝えられている。これらは窯跡等その内容について不明であり、名称のみが存在していると云ってもよい。

しかし、今回の調査の様に窯業にかかわると思われる地点が存在していることがほぼ確実となり、また、その作品であると思われる製品も存在することが判明した。問題は山積みの状態ではあるが、今後、考古学成果、文献資料の両面よりアプローチすることにより、これらの陶器について明確にしなければならない。

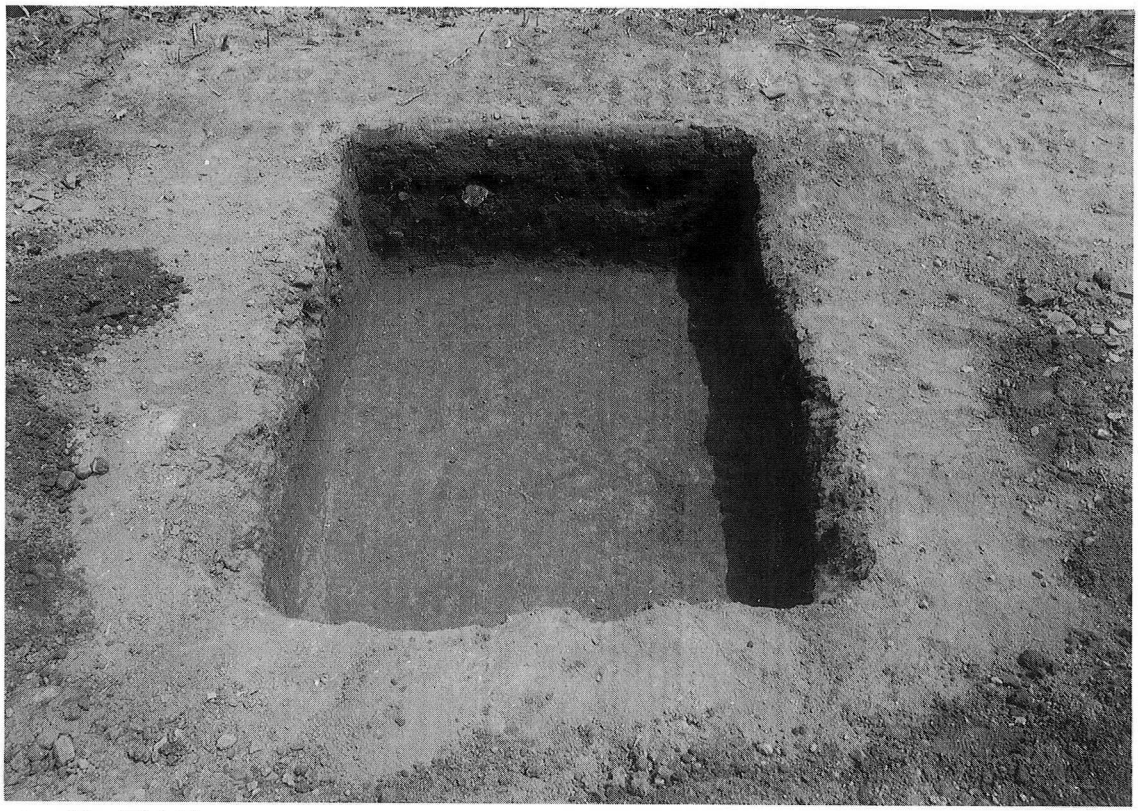
報告書抄録

ふりがな	かいづかし いせきぐん はっくつちょうさがいよう
書名	貝塚市遺跡群発掘調査概要
副書名	
巻次	16
シリーズ名	貝塚市埋蔵文化財調査報告
シリーズ番号	第 32 集
編著者名	前川 浩一
編集機関	貝塚市教育委員会
所在地	〒597 大阪府貝塚市畠中1丁目17番1号 TEL 0724(23)2151
発行年月日	西暦 1994年 3月 31日

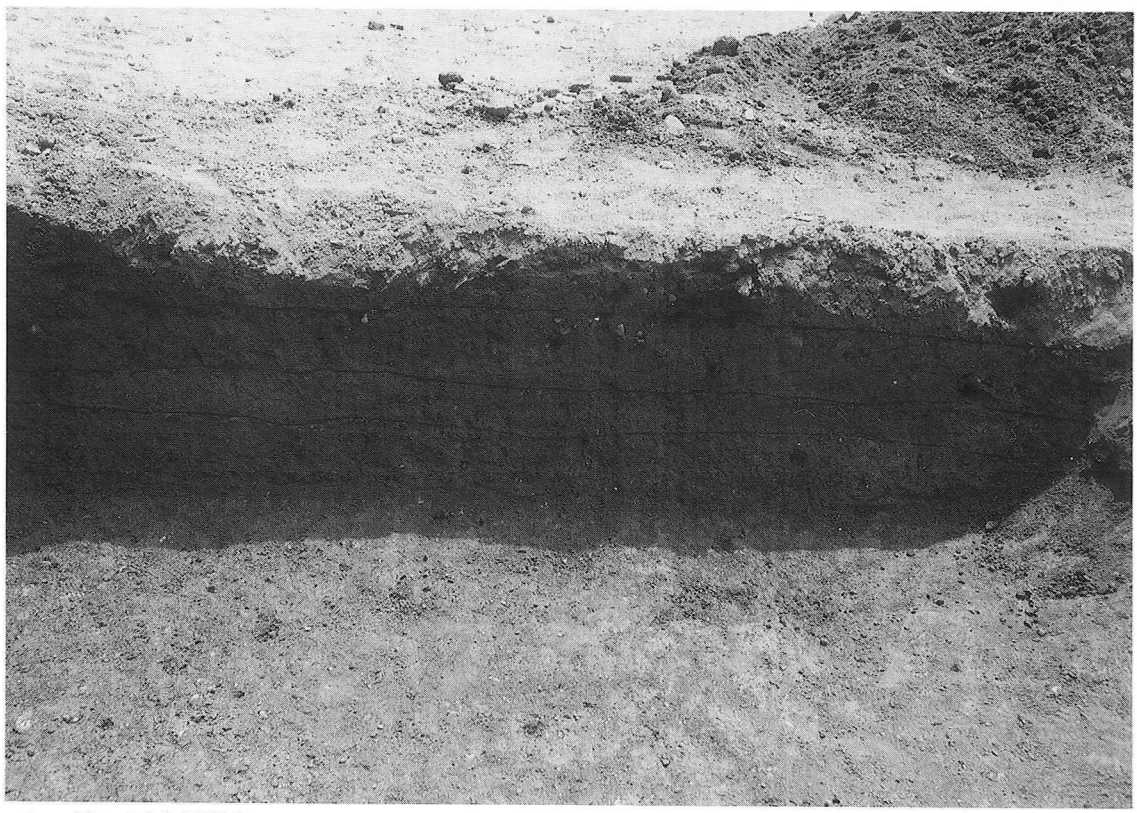
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
はたはいじ 秦廃寺	おおさかふ 大阪府 かいづかし 貝塚市 はんだ 半田	27208	10	34度 27分	135度 27分	19930527 19930531	25	住宅建替
かいづかじないちょう 貝塚寺内町 いせき 遺跡	おおさかふ 大阪府 かいづかし 貝塚市 みなみまち 南町	27208	22	34度 27分	135度 21分	19930708 19930709	66	住宅建替

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
はたはいじ 秦廃寺	寺院 集落	飛鳥時代 中世 近世	土坑 4	瓦、瓦器 羽釜、須恵器	近世の集落
かいづかじないちょう 貝塚寺内町 いせき 遺跡	城郭寺院	近世	なし	陶器、磁器 窯道具	近世の窯業 関係遺物

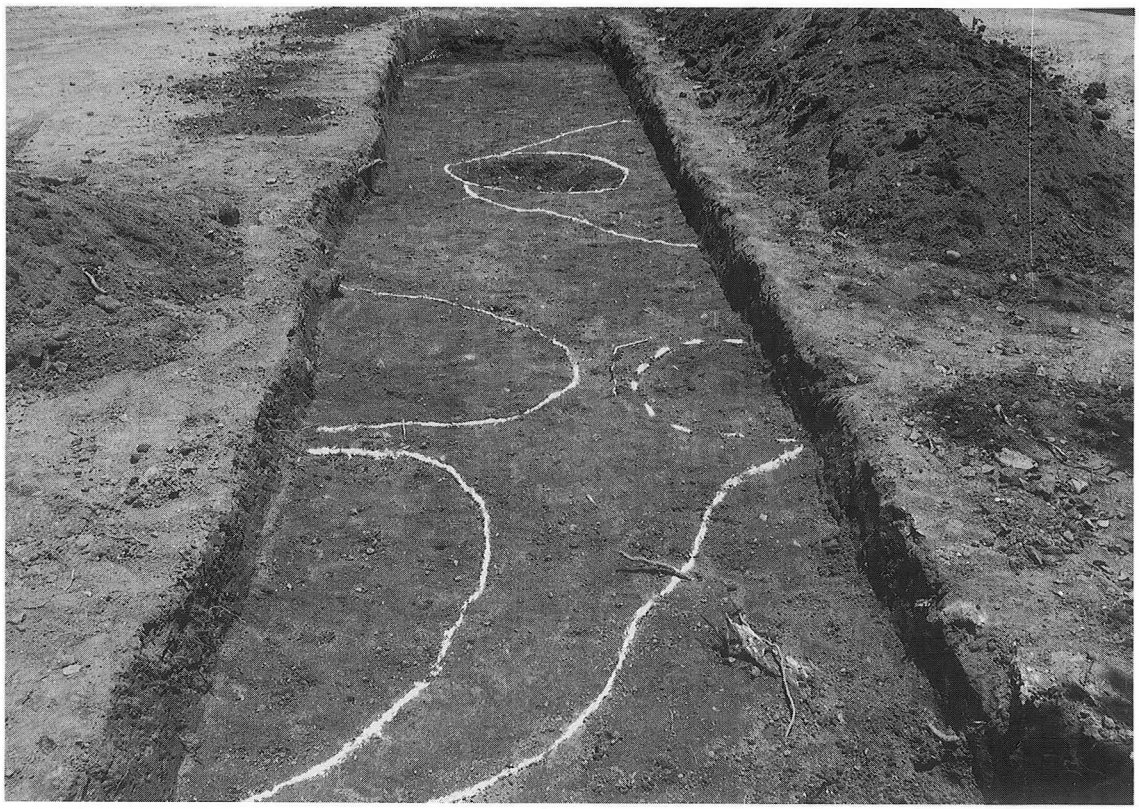
図　　版



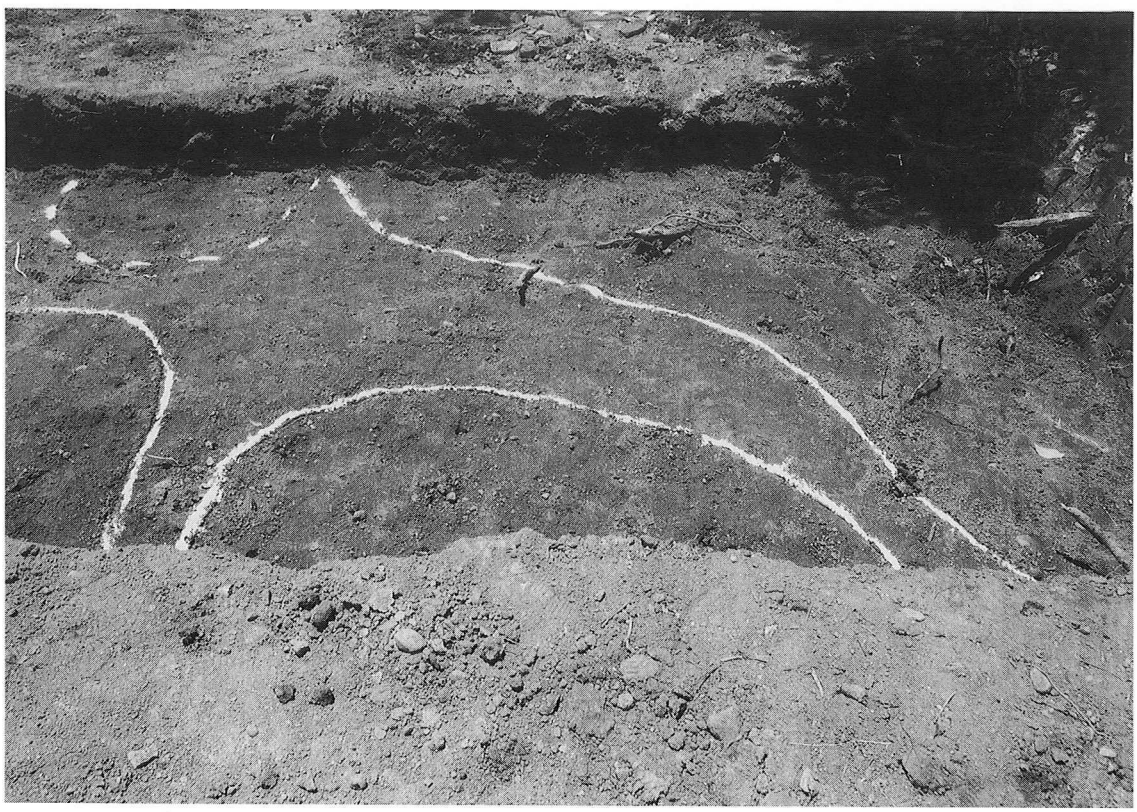
1.　第1区全景　　南西より



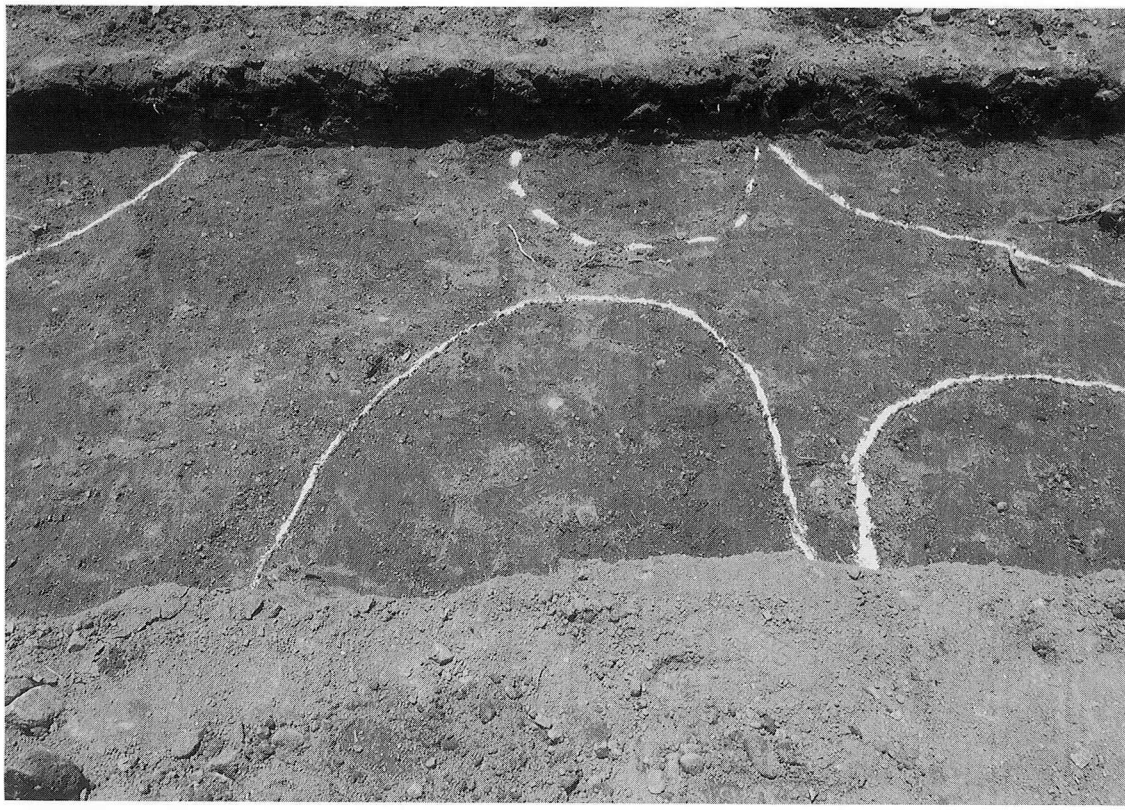
2.　第1区土層状況　　北西より



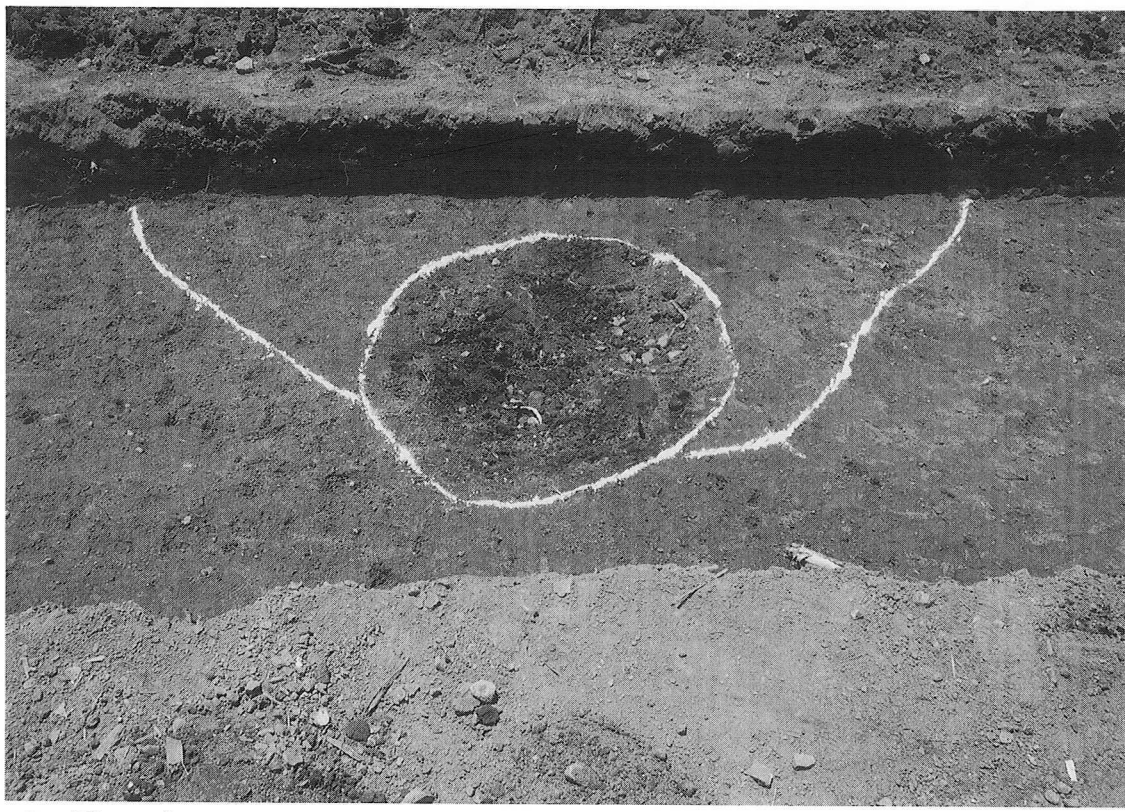
1.　第2区検出状況　　北西より



2.　同　　上　　南西より

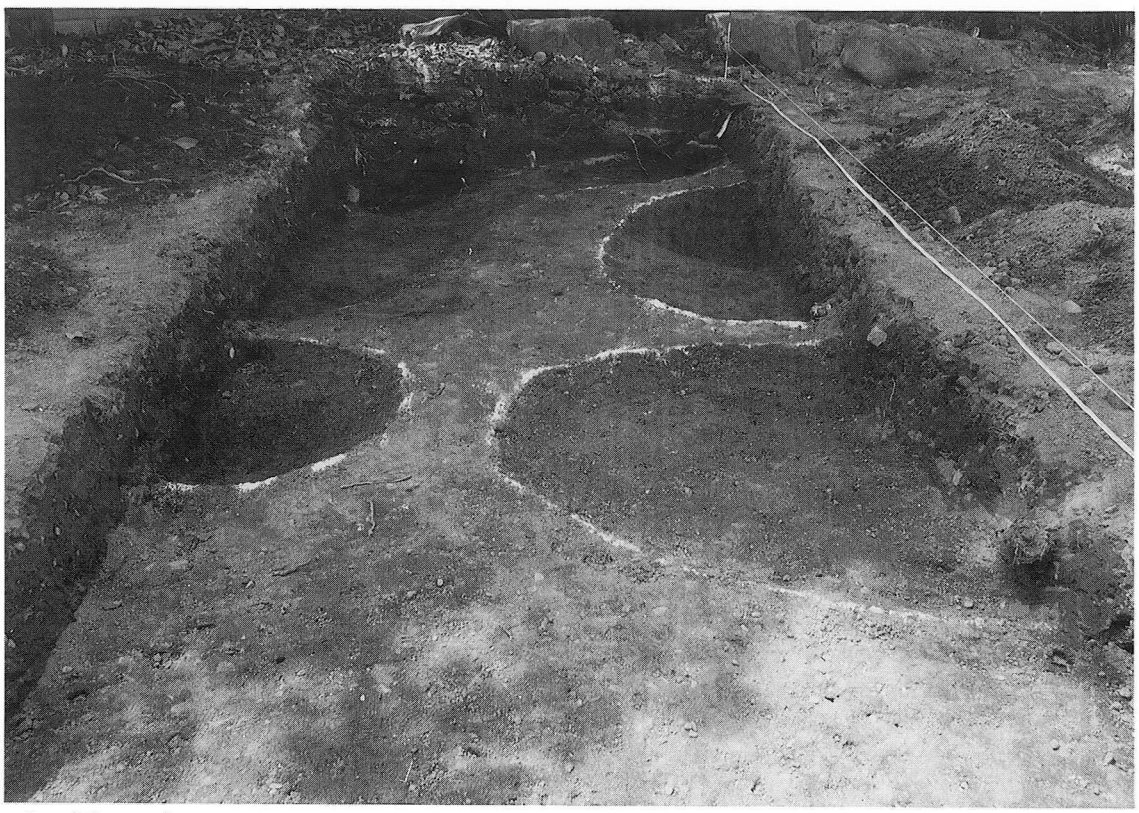


1.　第2区検出状況　　南西より

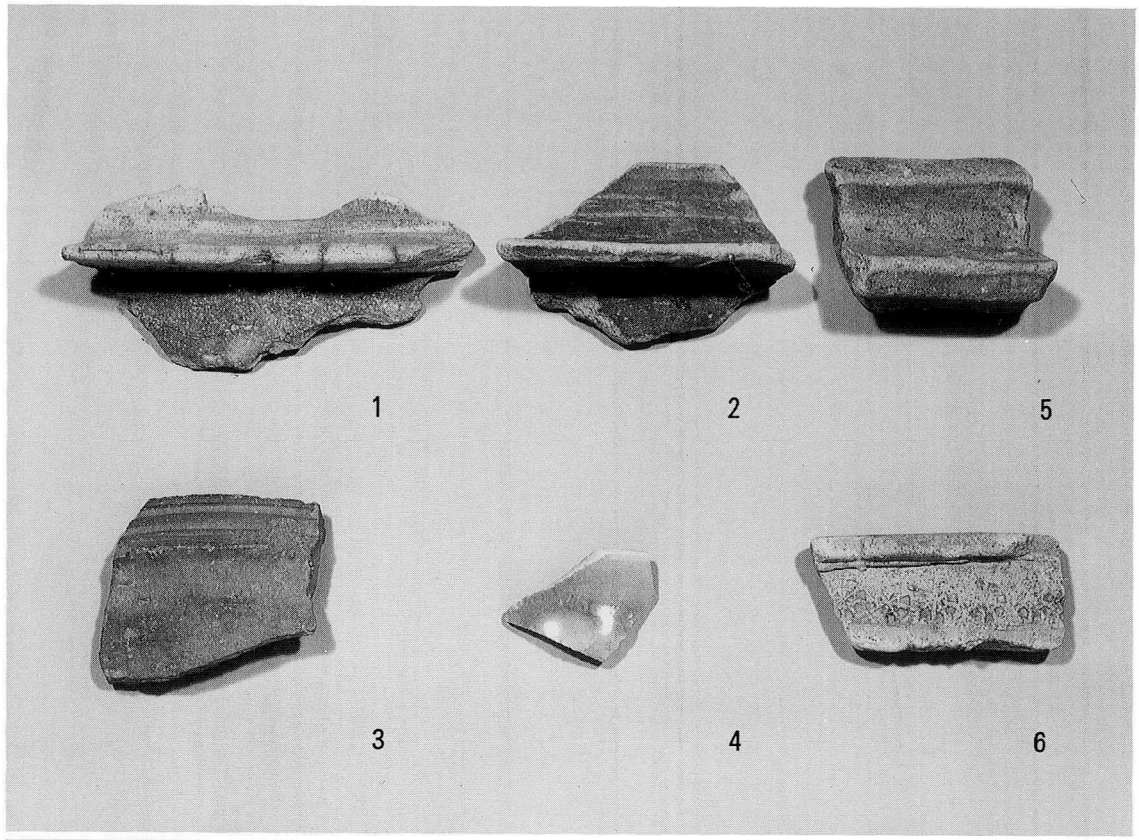


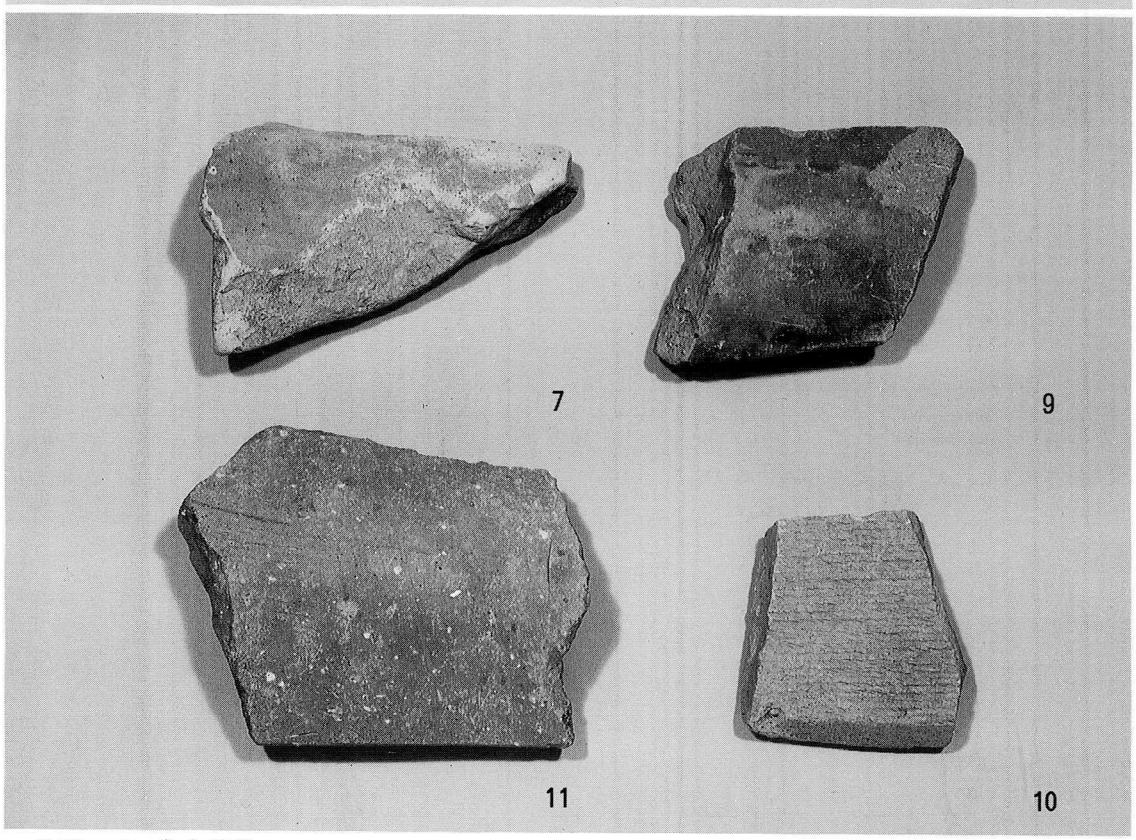
2.　同　　上　　南西より

1.　第2区完掘状況　　南西より

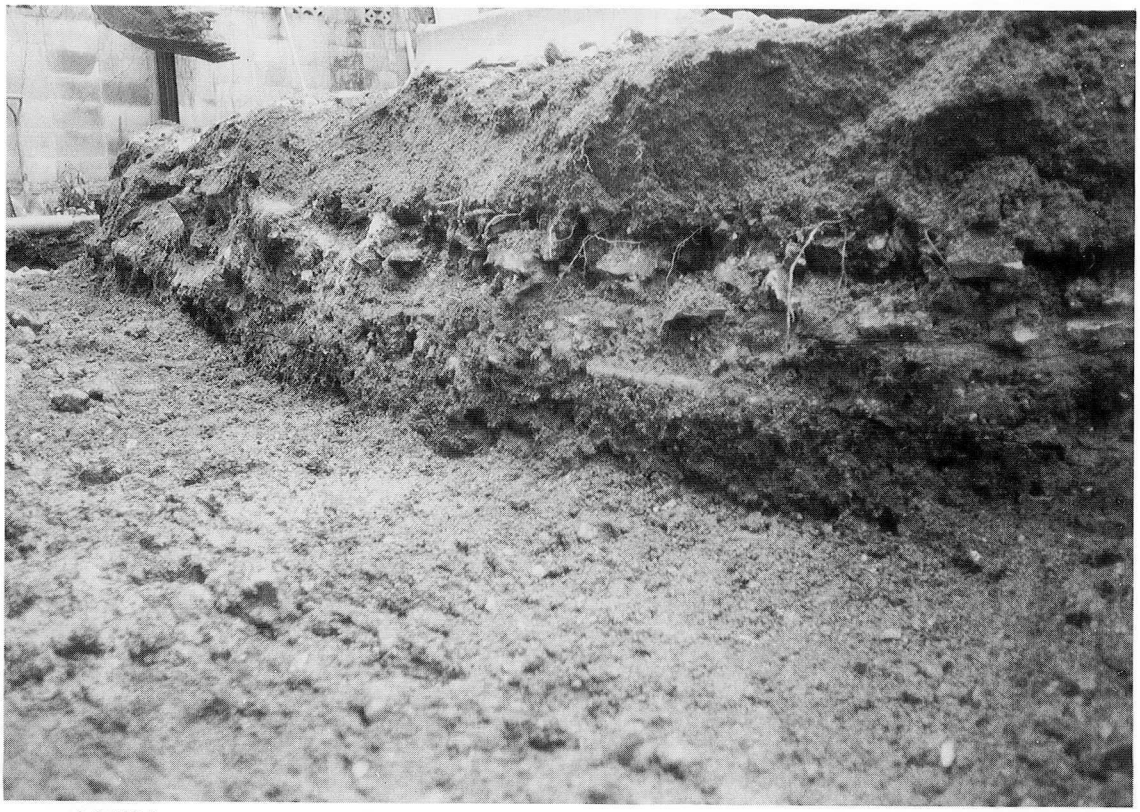


2.　同　　上　　南東より





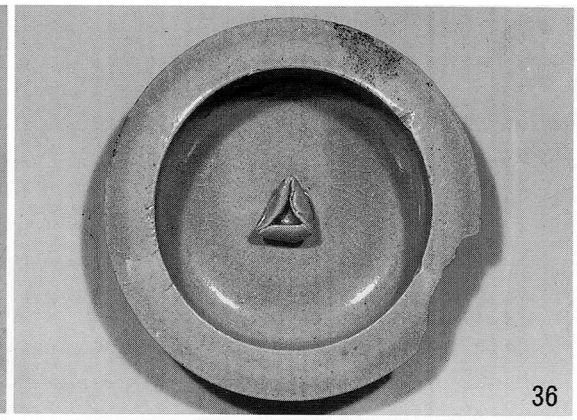
ＳＸ－１　出土遺物



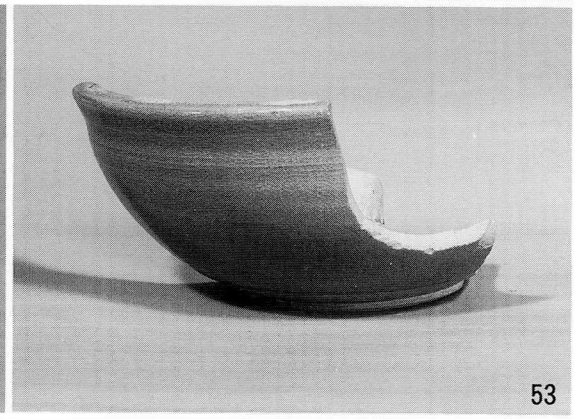
1.　土層状況　　南より

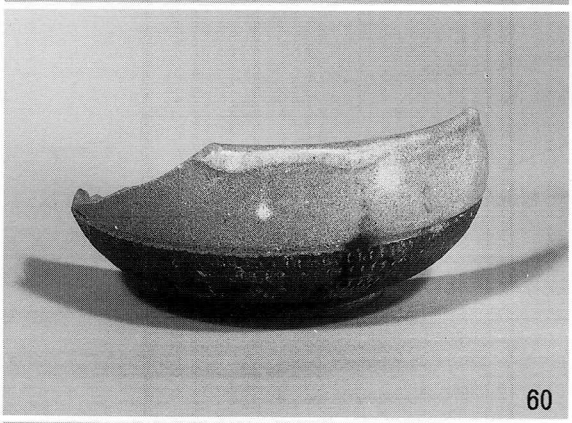
2.　遺物出土状況　　南西より

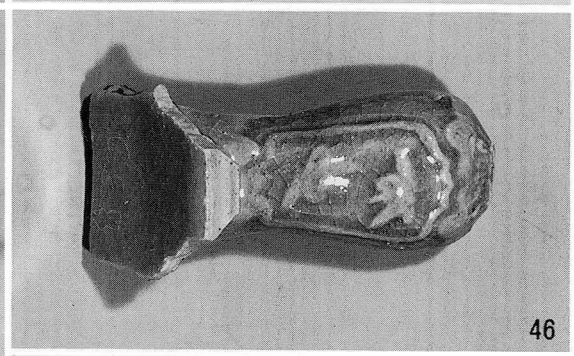
30

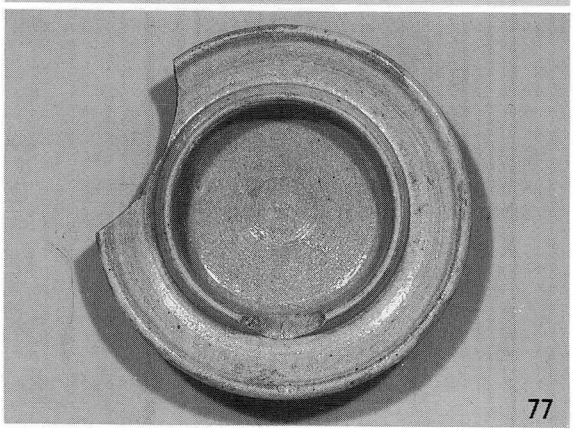

36

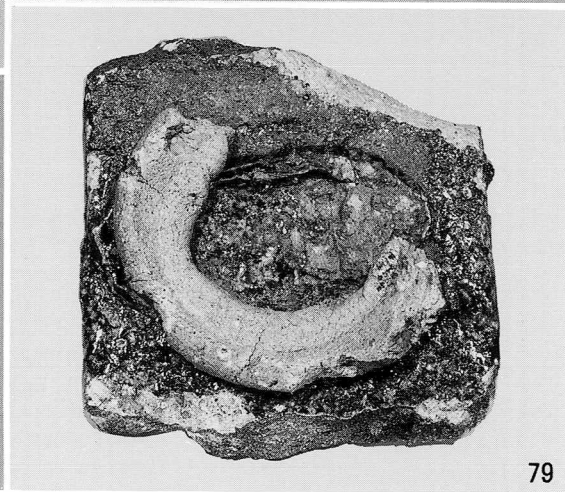
40


53

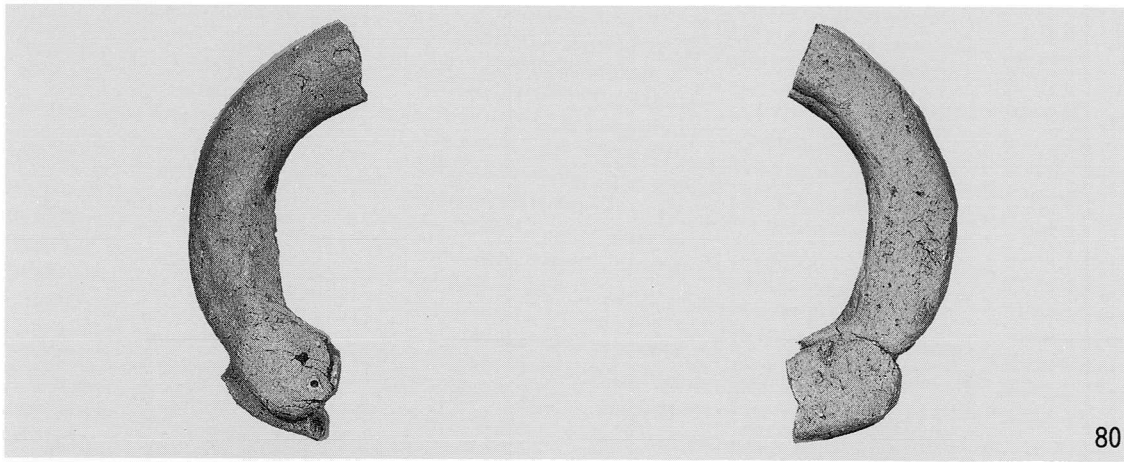

60

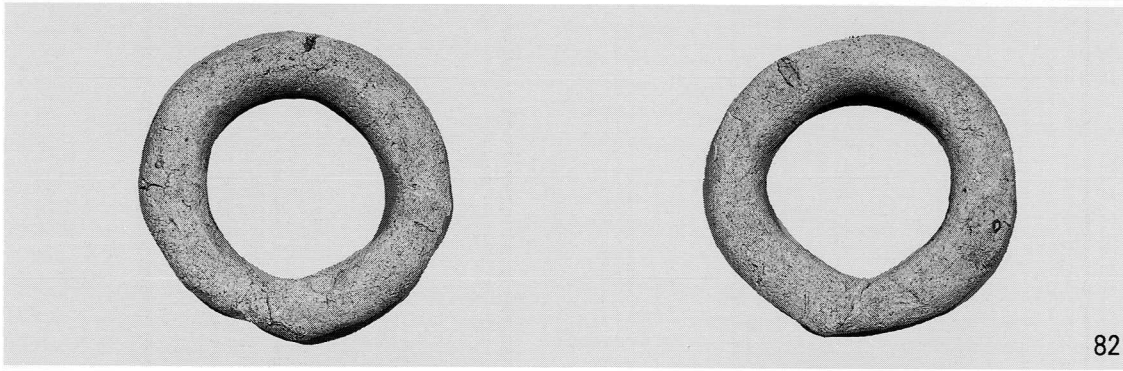

46

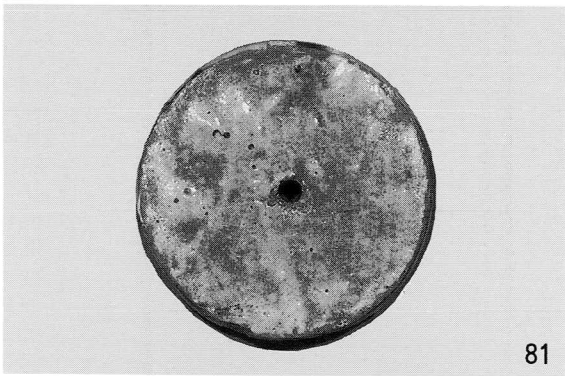

77

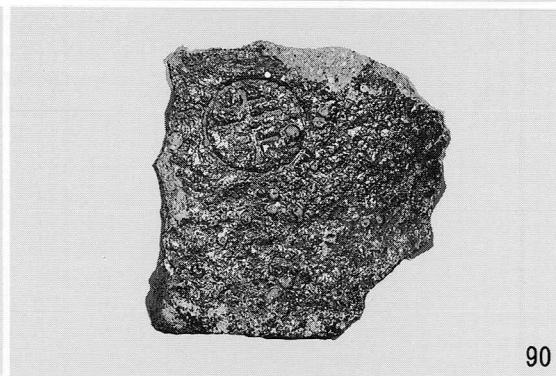

79

出土遺物

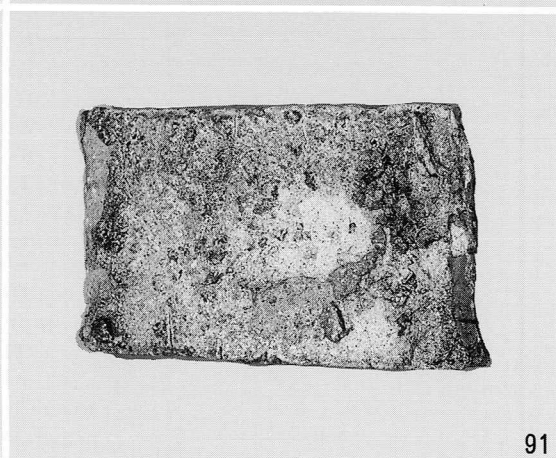

80


82


81


90

88


91

貝塚市埋蔵文化財調査報告　第32集

貝塚市遺跡群発掘調査概要16

発行日　1994.3.31

編集・発行　貝塚市教育委員会

貝塚市畠中1丁目17番1号

印　刷　摂河泉文庫（貝塚市北町20―18）

貝塚市埋蔵文化財調査報告第32集　正誤表

	誤	正
図版目次　図版6	2　遺物出土遺物	2　遺物出土状況
P3　　9行目	2断状	2段状
P10　9行目 P16　16行目	厘鉢	匣鉢